

# 「子育て支援」の実践力を高める 保育者養成方法の研究（その1）

——実践プログラム作成に向けて教育効果の検討から——

## A Study of a Childcare Person Training Method to Make Practice Power of “Child-Rearing Support” (Part 1)

——Consideration about Result of Education——

中 西 利 恵  
大 森 雅 人  
原 口 富美子

### 1. 研究の経緯と目的

保育者養成カリキュラムと子育て支援事業とを連携させ、学生の学びの場として展開し、教育の可能性やあり方を追求する研究が、ここ4～5年の間で盛んに試みられるようになった。私たちも、M短期大学専攻科幼児教育専攻カリキュラム内の「子育て支援実践学習」と「保育実践学習II」という科目において、学びの場としての展開の可能性について実践を試みてきた。実践にあたり、子育て支援の基本的視点である「子どもの発達の保障」と「親自身の発達の援助」の2つを見失わずに支援が展開される必要があることを確認した。もちろん、子育て支援の第一の目的は「子どものよりよい育ち」である。

以上のような子育て支援の視点を踏まえた上で、保育者養成と子育て支援事業における連携方法の研究に取り組んだ。研究の目的としては、今求められている子育て支援（特に子育てに関する相談や助言）の役割が果たせる保育者の養成方法を検討すること、そしてもう一つは「親としての役割」を果たすための親支援、つまり親になった人の「親育ち」への支援の方法を検討することである。私たちはこの2つの課題に同時に取り組める学習環境を開発し、実践結果の分析を目指しているが、まずは、保育者養成教育の立場から、どのような実践方法による展開が、特に学生にとつ

て教育的効果をもたらすかについて、プログラムのあり方を中心に検討し、報告する。

保育者養成教育においては、実際、子育て支援（特に子育てに関する相談や助言）ができる保育者の養成が急務であるとはいえ、その実践力の育成は教室での授業からは難しい。そうなるとう保育実習でということになるが、ほとんどの養成校も実習現場も、実習中には親（保護者）とのかかわりはあいさつや必要最低限度の連絡程度にするよう指導しており、短期間での実習で親（保護者）と積極的にかかわることは極めて難しい。したがって、相談や助言など親（保護者）と円滑で適切なコミュニケーションを図り信頼関係を築いていける保育者を養成するには、新しい養成方法の開発が必要である。

そこで、ここでは、学生が親とのかかわり方や支援のあり方を学習する環境として、より多くの学びが期待でき、そして親の方も学生とのかかわりから学びが得られると考えられる子育て支援事業「ふたば」と連携して実践を展開する。そして、学生も親もお互いが主体的に活動し、自覚的な学びが可能となるような教育方法のあり方について検討するため、参与観察を行った結果について、特に学生にとっての学びに関する事例をあげ、教育の効果を分析することを目的とする。ここでの分析結果は、学生たちが子育て支援（特に相談・助言）力を高めるための効果的な実践プログラムの作成のために活用する。

## 2. 子育て支援事業「ふたば」との連携

子育て支援事業「ふたば」は、S市地域子育て支援センターが2005年度より新たにに取り組むこととなった事業である。この事業は、子育てサークル育成の指導ならびに情報提供や仲間作りの支援を目的としている。従来の子育て支援は、支援者主導型の“恩恵的（してあげる）”子育て支援の性格が強かった。しかし、してもらうことを期待している受け身的な親を対象とする支援事業だけでは不十分であり、新しい課題が出てきた。その一つが、子育て支援活動に比較的積極的であり、できれば自主的に子育て

でサークルを運営したいという親のニーズに応えることであった。

一方、保育者養成校として従来から、S市地域子育て支援センターのメイン事業である「子育て応援団」（子育て支援スタッフが、手遊びや体操、おもちゃ作りやおやつ作りなど提供し、一緒に活動するという支援者主導型の活動）と連携した取り組みを行っていたものの、「子育て実践学習」や「保育実践学習 II」の授業実施にともない、もっと学生にとって学びが期待できる事業との連携を検討していた。と同時に、学生にとっての学びだけでなく、親にとっても活動意欲を高め、相互に学習効果を引き出すような連携方法を模索していた。

親との対応の経験が浅い学生にとって、積極的に人とかかわろうとする姿勢をもって活動に臨んでいる親の方が、“してもらう”ことを期待して参加している親よりも交流を図りやすい。つまり、子育て支援側の課題と保育者養成側の課題の両方に同時に取り組める連携が可能であると考えた。学生が親とのかかわり方や支援のあり方を学習する環境として、より多くの学びが期待でき、そして親に対しても彼らの活動意欲に応え、学生とのかかわりからも学びが得られると期待し、連携して実践を試みた。

### 3. 実践の概要

#### 3-1. 学生の実践活動

授業のねらいとしては、地域のニーズや保育者の実情に応じて実施される子育て支援事業への対応力と、子育て支援の目的を見失わずに適切に実施できる実践力を養うことを設定している。つまり、親とのかかわり方や支援のあり方を学ぶことを目的としている。

子育て支援事業「ふたば」と連動させた実践は2005年度から行った。「ふたば」の活動は合計6回で、学生の実践活動は、親子がセンターに集合し部屋に入室し始める頃から、活動終了後帰り支度をして部屋を退出するまでである。6回の活動内容の概要は以下の通りである。なお、各回とも活動計画を作成し、実践を行った。例として、第1回目の活動計画を表1に示す。

「子育て支援」の実践力を高める保育者養成方法の研究（その1）

**第1回目**：初めて出会う参加者たちが「はじめまして、これから一緒に活動する仲間です。よろしく！」という気持ちで活動を進めていけるよう、場づくりをみんなでやる。

**第2回目**：スライム遊びを通して、親子で感触を楽しんだり、遊び方

表1 “ふたば” 第1回目/活動計画

日時	○月 ○日( ) 10:00～11:30		参加状況	天候	
活動のねらいと 主な内容	スタッフ主導での自己紹介や名刺交換を通して初めて一緒に活動する緊張をほぐし、これからの活動に向けてお互いが知り合うきっかけを見つける。スタッフ主導での手遊びやパネルシアターの実践を通して、グループでの活動内容や方法について少しずつ学んでいく。いろいろな役割(日誌、掃除など)を果たすことを通して、グループでの活動には責任が伴うことを知っていく。				
援助のねらいと 主な内容	これから一つのサークルとして活動していく親子が、まずはお互いが打ち解けていけるきっかけをつかめるよう、自己紹介や名刺交換活動を実施する。さらに、母親が簡単な手遊びなどに興味を持つよう、手遊びやパネルシアターを親子に楽しんでもらう。活動全般を通して、母親の表情や態度、様子を気遣い、母親の気持ちを理解するように努め、活動しやすい雰囲気作りに配慮する。細やかな配慮を通して、母親との信頼関係を築くことを心がける。				
準備物	受付名簿、鉛筆、個人カード、名札、領収書、パネルシアターセット(このぼり、いちご)、消毒液、お茶、コップ、名刺フォルダ10、日誌、手遊びプリントセット、モップ				
時間	活動内容	参加者の活動	担当	スタッフの援助および配慮事項	担当
9:50～	準備 受付	受付し、名札を渡す。	当番	ホールやおもちゃを清潔に保ち、子どもの目線での安全の確認をしておく。 当番がスムーズに受付出来るよう援助する。	全員 M
	コーナー遊び	利用料1,000円を払う。 コーナーで遊ぶ。		当番の子どもが保護者と離れない場合は、園庭で遊んだり、子どもが楽しめる遊びを促す。 領収書を渡す。 個人カードと鉛筆を渡す。	A M S
	参画説明	簡単に自己紹介(名刺の内容を話す)。		名刺を回収し、カラーコピーする。(11部) 一人きりになりそうな母親に話しかけ、他の母親との仲立ちをする。	S 全員
10:10～	自己紹介			場の雰囲気盛り上げる。	全員
10:25～	片付け うた 手遊び	おもちゃを片付ける。 「だれでしょう」 「グーチョキパーでなにつくろう」 「でんでんむしどこだ」 「コロコロたまご」	全員	親子も含め全員で片付けられるような言葉がけをする。 全員が楽しめる雰囲気を作る。 全員が楽しめるよう配慮し、色んな手遊びの展開を指導する。	全員 M・A A
10:40～	パネルシアター	「このぼり」 「いちごいちご、いちごはどこ？」		“こどもの日”の由来などからこのぼりへの興味や関心が持てるようにする。 春の草花や虫などの自然に親しめるようにする。	A・M S・A
10:55～	おやつ	おやつタイム お茶を用意する。 名刺を交換しながら、簡単なゲーム(ウインクゲーム)をする。 名刺フォルダに収納する。	当番	テーブルを3台出す。 テーブルの消毒、お茶の準備などがスムーズに行えるよう援助する。 当番の子どもに安全に注意する。 名刺を10部と名刺フォルダを渡す。	全員 M S・A M
		当番は日誌を書く。	当番	会話が弾んでいない場合は様子を見て、アイスブレイキングゲームを行う。 手遊びのプリントを配布し、不明な点はいつでも指導できるようにしておく。 日誌の書き方を援助する。	全員 M
11:20～	片づけ 帰りのあいさつ	モップをかけるなど、あと片付けをする。 次回の確認をし、帰りのあいさつをする。		あと片付けのようすを見守り、必要に応じて援助する。 次回の内容説明と、第2回目への意欲や期待がふくらむよう、帰りのことばがけをする。	全員 M

を工夫したりする。さらに、保護者は作り方を知り、今後のサークル活動の参考になるよう取り組む。

第3回目：散歩にでかけ（消防署・有馬富士公園）、親子で戸外での遊びを楽しむと共に、普段の活動場所以外での活動を経験し、今後のサークル活動の参考にする。特に、今回は市政教室「あおぞら号」の利用法についても知る。

第4回目：この日はM短期大学で、保護者と子どもが別々の活動に取り組む試みをする。子ども：保護者と離れて模擬保育室で遊ぶ。保護者：子育てサークル作りの講習と演習を行う。

第5回目：最終回に実施する「おたのしみ会」の準備のための話し合いを行う。保護者が話し合いをしている間、子どもたちは園庭でスタッフといっしょに元気に遊ぶ。

第6回目：保護者が自分たちで企画した「おたのしみ会」を自分たちで運営し、みんなで楽しむ。

### 3-1-1. 対象

S市地域子育て支援センターが実施するグループ子育て支援活動「ふたば」に参加する親子9組（母親9名、男児5名、女児4名）である。子どもの年齢は2歳～2歳9ヶ月、母親の年齢は26～39歳である。

なお、S市地域子育て支援センター事業として実施されていた支援メニューは、①子育て応援団、②体験保育、③園庭開放、④園内開放、⑤電話相談、⑥来所相談の計6種類である。もっとも利用率の高い「子育て応援団」は、スタッフがおもちゃ作りやおやつ作り、手遊びや体操などを提供し一緒に活動するという内容で、「恩恵的（してあげる）子育て支援」の性格が強い。

### 3-1-2. 方法

それぞれの親子がセンターに集合し部屋に入室し始める頃から、活動終了後帰り支度をして部屋を退出するまでのおよそ9：50～11：40の間（回により多少の時間のずれがある）、参加者の活動に参画すると同時に観

察した。基本的にはその日にあった親子の言動、スタッフの援助、自分自身の援助などについて観察終了後に「活動記録」に記載した。観察にあたって学生には、自分からも積極的に親子への働きかけをする参与観察法を指示した。観察後につけた記録や活動後のスタッフの反省や感想、毎回当番の母親がつける当番日誌をもとに、事例の分析と考察を行った。

#### 4. 実践を通した学生の考察

##### 4-1-1. 事例 1

母親には事前に名刺用の紙が配布されており、親子の氏名とその他好きなことを記入し、活動初日に写真と一緒に持参するよう指示されていた。当日、スタッフが母親から用意してきた写真と名刺を受け取り、写真付きの名刺として仕上げ、それを参加者の人数分コピーするという段取りである。名刺用の紙は写真を貼るスペースと、その横に罫線が8行分引いてあるだけのシンプルなものである。スタッフ側から指示されていたのは親子の氏名の記入だけで、その他具体的な指示はなく自由である。実際できあがった名刺を見ると、まず写真スペースには、親子で写っている写真、子どもだけの写真、母親だけの写真、かわいいシールというようにさまざまである。その中で、一番多かったのは親子の写真と子どもだけの写真だが、母親だけの写真もある。自分だけ写っている写真を持ってきてしまった母親は、まわりを見渡し「えっ！？子どもの写真を貼るんだったの。私、自分だけしか写ってない写真を持ってきてしまっ…」と言う。スタッフがすかさず、「いいんですよ。いいんですよ、お母さん。お母さんも主役なんですから。」と言葉をかける。また、記載内容としては親子の氏名以外に、母親の趣味や特技、子どもが今興味を持っているもの、携帯電話の番号、アドレスの他に、物語風に自己紹介が書かれていたり、簡単な絵や装飾が施してあったり、色ペンで鮮やかに彩られていたりと実にさまざまである。

次に、一人ひとり順番に自己紹介をする。自分自身や子どものことを具体的に一生懸命に語っている。一人ひとりの語りが非常に長いですが、参加者

はうなづいたり、笑ったりと熱心に耳を傾けている。

#### 4-1-2. 考察 1

この事例から、母親が非常に積極的に活動しようとする、あるいはしたいという意欲が伝わってくる。もともと積極的な母親が参加しているので従来の活動に参加していた母親とは少し異なると思われる。例えば、名刺用の記載内容をみると母親自身の紹介に関する記述が非常に多かったことから、母親たちの積極性の高さを感じた。子どものことのみ記載されている名刺は1枚だけであった。名刺用の写真の例でも、自分だけ写っている写真を持ってきてしまった母親がいたが、本人は他の名刺を見て初めてそのことに気づき、とても恥ずかしそうにしていたが、この母親の反応はむしろ新鮮に感じた。親子で活動する場では、どちらかという母親が子どもの後ろで控えめに活動している場面を目にするが、本当はこの母親のように自分の存在を認めてほしいという願望が現れてきても、実はあたり前ではないかと思う。グループ活動はあくまで親子が共に主役である。NPO 法人びーのびーのが主催する「おやこの広場びーのびーの」の活動においても、ひろばは子どものための場か、親のための場かという議論が起ることがあるという。「びーのびーのは『親子（両方にとって）のひろば』であることに大きな意味があるのではないか」（NPO 法人びーのびーの、2003）と結論している。親子両方にとっての活動になるためには、まずは活動に対する母親の願いや、想いや、意識の違いをあるがままに受け止めることが求められる。積極的な母親だからこそ母親としての自然な想いがみえた。自分自身だけの写真を用意してきて恥ずかしくて小さくなっている母親の想いを受け止め、親子両者が主役となる活動の第一歩を踏み出せるように援助することが大切である。

活動初日の自己紹介はみんな緊張している中かなりの時間をとったが、母親たちは買い物が好きとかおしゃべりが好き、お酒が好きなどそれぞれが具体的に一生懸命に語り、自分を知ってほしいという想いとお互いを知りたいという想いがあふれていた。今後の活動に意欲的に取り組むためにも必要な時間であると考えた。

#### 4-2-1. 事例 2

母親 O さんによる絵本の読み聞かせをすることになる。私たちは、参加者が絵本を見やすいように邪魔にならない場所に移動する。参加者は、最初に座った場所から移動することなく体をのりだして絵本を見ている。親のそばから離れられる子ども 2 名だけは、絵本の正面まで移動して読み聞かせを聴いている。

#### 4-2-2. 考察 2

私は幼児教育専攻の学生なので、絵本の読み聞かせの際の援助内容や方法については授業や実習等を通して実践的に学習を積んでいる。そのため、複数を対象に絵本の読み聞かせする場合は、まず絵本を見やすい位置にみんなが居るかどうかが確認することが身についている。しかし、母親はわが子だけに読み聞かせすることはあっても、大勢を対象に絵本を読み聞かせるという経験は少ないであろう。それゆえ、聞き手の立場に立った配慮について気づかないとしても理解できる。また、みんなの前で読むという緊張から、まわりに配慮する余裕を持つことも難しいであろう。活動への積極性が、活動の指導技術の豊かさと比例するわけではない。やはり、このような母親の状況を理解してスタッフはタイミングのよい援助を心がけ、むしろやってみせる必要があると感じた。手遊びや、ゲームの内容など遊び方を知ることも今後の活動に必要なだが、参加者がその活動に気持ちよく臨めるための具体的な配慮や援助についても学べるような支援は、母親が今後自主活動へと発展させていく期待度が高いだけに、このような場で伝承されることが望ましいと考える。さらに、それも支援の役割ではないだろうか。

#### 4-3-1. 事例 3

おやつの時間になり、机と椅子を用意する。子どもは椅子に座り、保護者は隣に寄り添う。お茶やジュース、おかきやラムネ、プチゼリーなどのお菓子を目の前に「うちの子これが好きでね～。」「私これ食べ出したら止まらないの。」と会話がはずむ。みんなで「いただきます。」をして食べ始



める。「うちの子すごく食べるの。食べながら両手に持ってるのよ。」「ジュースもっと飲みたいの？ジュースくださいって言っておいで。」「住んでいるところ近いですね。」「上の子見てたら下の子はほったらかしになっちゃって。」など、活発に会話が交わされている。

#### 4-3-2. 考察 3

好きな遊びやその他の一斉活動の時は、お互い話しかけたいが話しかけづらさもどかしさがうかがわれた。かなり積極的な母親たちが集まっているとはいえ、やはり何か共通の話題やきっかけがないと会話がはずみにくいのは当然のことであろう。ところが、おやつの時間になるとテーブルの上に並べられたお菓子の話題から始まり、子どもや自分自身のこと、家族のことなど次々と話題が発生し、にぎやかに会話が交わされている。母親の表情もいきいきとしている。このような時間は、阿部（2003）が子育てルームコアラの感想から分析しているように、「母親としてではなく大人としての話をしたいという欲求を満足」させているのではないだろうか。「話すことがこれからの子育てのエネルギーになっているようであり、何よりも『同じ気持ちがあち合える』という安心感」（阿部、2003）につながる機会を作り出していると思う。つまり、食事を一緒にするという活動は、参加者同士の仲間作りが自然に進む場として、そしてスタッフとの距離も縮められる場として絶好の機会である。

#### 4-4-1. 事例 4

絵本の読み聞かせを始める前、順番にトイレに行く。排泄を済ませた親子（母親は子どもに付き添って行く）はホールに戻ってきて待っている。ところが、母親 M さんとその子どもがなかなかトイレから帰ってこない。O さんが絵本の読み聞かせをすることになっているのだが、M さん親子が戻ってこないでみんなは特に何もせずホールで待っている。すると、M 先生が手遊びを始める。「あおむし」と「はじまるよ」の手遊びがちょうど終わる頃、M さん親子が「やっと済んだー。長くてごめんねー。」といいながら戻ってくる。O さんは絵本の読み聞かせを始める。

#### 4-4-2. 考察 4

集団活動の場合、自分の子どものために他の人に迷惑をかけてはいけないという意識が働くのは、常識的な親であれば自然であろう。特に、みんなと一緒に活動したいと思っている母親たちなので、余計に「みんなを待たせている」と母親 M さんは焦っているようだった。ところが、M 先生がさりげなく手遊びを始めることによって、待たせる側と待つ側のそれぞれの立場にある母親に、「待たせてしまっている」と「待たされている」という気持ちをそれほど感じさせないような雰囲気を作り出した。この実践では、M 先生他子育て支援スタッフが一緒に活動してくれているが、今後母親が自主的に子育てサークルを運営する場合には、参加者がリラックスできる雰囲気づくりや場づくりが不可欠だ。みんなが過度に気を遣わずに楽しく過ごせるような配慮とそのための実践力が求められる。そのことは、実際にこのような場面に遭遇し、体験することにより学習できるのではないと思われる。また、もう一つの配慮として、2歳の子どもの姿について理解が深まるよう援助する必要があると考える。つまり、母親は2歳の子どもの子育て真っ最中ではあるが、2歳の子どもの発達の姿については十分に知らなかったり、わからなかったりすることが多い。したがって、2歳の子どもはこうゆうものなんだよとか、この時期は何でも自分でしたがるがまだうまくできないので時間がかかるんだよ、というようなことをその場面で伝えることにより、母親による子どもに対する理解を自然体で深められると考える。そして、そこで学んだことを子育ての知識や知恵として、自主的なグループ活動に取り組む際に伝えていってくれることにより、子育て支援の輪が広がることになるとと思われる。

#### 4-5-1. 事例 5

この日の活動は、あおぞら号という市のバスを借りて、消防署と有馬富士公園へ行くというものである。バスに乗り込むと子どもたちは窓から外をきょろきょろ見ている。消防署では、消防車に興味津々であり、母親たちは消防車に乗っている子どもの写真を撮る。有馬富士公園では、2階のテラスで母親の手作り弁当を食べる。「おいしいー。」「たこさんウインナ

一だ。」など子どもの声が聞こえる。「すごい。それ自分で作ったん？」と母親同士の声も聞こえる。食べ終わると子どもはテラスで汗だくになりながら満面の笑みを浮かべて走り回っている。大型絵本を当番の母親に読んでもらったり、館内を見学したりする。その間、今まであまりかかわりのなかった母親同士も一緒に並んで会話を交わしながら歩いている。親子で歩いたり、母親同士で歩いたり、子ども同士で走ったりといろいろな組み合わせで移動している。見学ルートの最後に木を削った積み木のコーナーがあり、子どもたちはそこに集まり遊び出す。母親はそのまわりで見守っている。私たちは子どもたちと一緒におしゃべりしながら積み木の塔を作ったりして遊ぶ。集合時間になり片づけをしているとき、今まで無口で表情もあまり変えない I 児が「楽しかったね。」とにっこり笑いかけてくる。子どもたちはバスに乗り込むとすぐに眠り出す。

#### 4-5-2. 考察 5

この日は室内での活動とは全く違う雰囲気であった。子どもからも母親からも今までとは異なる面がみられた。みんな生き生きとして、特に子どもの姿には驚かされた。今までの活動場面では比較のおとなしくて口数も少なく、したがってどちらかというの内気なタイプの子どもたちが多いと感じていたが、この日はじっとしている時がないほど活発に走り回り、その人数が徐々に増え、最終的には一人以外全員の子どもたちが群れて走っていた。みんなとても楽しそうで汗びっしょりになりながら遊び続けた。いつもは無表情な子どもも終始ニコニコ笑顔だった。今までの活動からは子ども同士のかかわりがあまり見られなかったので、一緒に走り回っている姿は特に印象的だった。子育て支援活動において、子どもへの直接的な支援を考えた場合、このように子どもたちの活動が生き生きと展開する屋外での活動は、一連の活動プログラムの中に積極的に組み込んでいく必要があると思う。室内では見られなかった子どもたちの姿を目の当たりにし、屋外での活動の効果をあらためて認識した。また私たち自身、参加親子と今までなかなか十分なかわりを持ってずにいたが、今回の屋外活動を通して、母親とも子どもとも距離が縮まったような気がした。今回の

ようにバスを使用して見学コースも入れた大がかりなものではなくても構わない。いつもの場所（室内）とは違う環境を用意することによって、雰囲気も開放的になり交流が持ちやすくなるだろう。さらに、屋外ならではの大型絵本の活用などいつもはなかなか味わえない体験の場を設けることも良いと感じた。今後、母親たちが自主的にサークル活動を運営していく場合、活動計画を立てるにあたり屋外の活動も積極的に取り入れてくれるためにも、よい経験ができたと考える。

#### 4-6-1. 事例6

この日、母親は子育てサークル作りに関する講義を受け、サークルメンバー募集のチラシ作りの演習を行う。子どもたちは母親と離れ、大学の模擬保育室でスタッフや学生と遊ぶ。母親には受付であらかじめ子どもが不安がって泣きやまない場合、講義室に連れてきてほしいかどうか確認する。1名以外の母親全員が連れて来ないでほしいと希望する。模擬保育室ではままごとセット、車、電車・レール、ブロック、絵本などさまざまな遊具が用意され、子どもたちは興味津々である。しかし、しばらくすると母親がいないことに気づき「おかあしゃ～ん。」と泣き出してしまう。1人が泣くと他の子どもも母親がいないことに気づき、あちらこちらで連鎖反応が起こり「おかあさ～ん。」「ママ～。」と泣き出してしまう。手をつないで外へ散歩に出かけたり、抱っこして庭や池の小動物を見せて歩いたりするものの、「ママ～。」というので「ママは今あそこでお勉強してるから、〇〇ちゃんも頑張ろうね。」と話す。小さく「うん。」とうなずく。Y児はひざの上で指を吸いながら離れようとしめない。S児とR児とH児は泣きやまず、ずっと外で散歩をしている。T児とI児は「ママは？」と聞くことはあったが、最初から最後まで機嫌良く遊んでいる。母親が勉強から帰ってくる時間が近づき、屋外にいた子どもたちも模擬保育室に戻ってくる。最初から最後までずっと泣き続けている子どももいる。そこに母親が帰ってくる。泣きながら母親に飛びつく子、ゆっくりと母親のもとに行き笑顔で抱きつく子、母親に「おりこうさんにしてた？」と聞かれて「うん。」と応え、また今まで通り遊んでいる子もいる。

#### 4-6-2. 考察 6

子どもの不安な表情とは異なり、勉強を終え戻ってきた母親の表情はいきいきとしていた。朝の受付時の雰囲気とは違い、子どもと離れ自分の時間を持てたことで気分がリフレッシュできたのだろう。母親たちみなが一応に「学生に戻ったような気分だ。」と口にしながら戻ってきた。その日の日誌にも「初めて子どもと離れ、少し心配しながらも、パソコンを思う存分楽しめて良かったです。」「普段経験できないことを子どもから離れて経験でき、時間を有効に使えて良かったです。子どもにとっては親と離れて不安だったと思うけど、良い経験になったと思います。」と書いてあった。母親の「楽しかった」という声が多く聞かれた。そこには充実感があふれていると感じた。一方、子どもは母親と離れ不安になり泣き出していたが、そのような反応は実は母親への愛着がしっかり形成されており、安定した親子関係が築けているということである。この親子別の活動によって、普段は24時間ずっと一緒にいると実感として湧きにくい、「この子は私を必要としている」「私もこの子を愛している」という思いを確認できたと思う。そのことは今後さらに良い関係へと向かう力になるだろう。この活動の参与観察を通して、親子が離れ、母親が自分の時間を持ち、リフレッシュでき、気持ちに余裕をもたせることができるような機会の必要性を痛感した。

#### 4-7-1. 事例 7

この日はお楽しみ会の企画に取り組む。子どもは園庭で子ども同士やスタッフと三輪車やブランコ、鉄棒、すべり台、水遊び、虫探し、おにごっこなど好きな遊びをする。母親はホールで話し合いを進めていく。母親と離れられない子どもは部屋の中で母親のそばにいてもよいということになっていたが、S 児は屋外が好きで、しかも母親と一緒に園庭で遊びたいと言って泣きやまないため、母親の B さんは結局 S 児と一緒に園庭に出る。そのため、企画の話し合いにはわずかな時間しか参加できずにいる。前回の時にお楽しみ会でどのようなことをしたいか、それぞれ考えてきてもらうという課題が出ている。M 先生が進行役となり、先生に近い母親

から順番に発表する。まずは、Tさんが「アンパンマン体操」を提案し、次にYさんが「ハンカチ落とし」「ずいずいずっころばし」「なべなべそこぬけ」、Kさんは「ボール入れ（立てかけてある穴のあいたものにボールを投げ入れる）」「指人形」「手作りのカブトムシでおすもう」、Oさんは「新聞紙ジャンケンゲーム」「うちわで風船バレーボール」「百人一首でぼうずめくり」、Nさんは「ロンドン橋おちた」、Hさんは「宝探し（お菓子）」、ちょうどホールに少し戻ってくるのができたBさんは「4対4で競争（うちわの上にピンポンをのせる）」と案を出す。スタッフから指示は出ていないが母親たちはみんな自主的に記録をとっている。発表を聞きメモをとりながら、自分以外の人が発言すると「あっ、それおもしろそうだね。」や「へえ〜。」といった言葉が自然と出てくる。「ずいずいずっころばし」の提案が出た時は、Tさんが「えっ？何それ？どうやってするん？」と言うとまわりの母親たちが「知らんの？こうやって手だして丸めてな、こうやってするんやで。」と実際にやってみせる。「おもしろい！」とTさんが言う。「ロンドン橋おちた」の案が出たときも同じようなやりとりがなされる。その後、提案された意見を元に当日の具体的なプログラムを決めていく。

#### 4-7-2. 考察7

母親が提案した内容は、準備も少なくその場ですぐにできる遊びが多かった。子どもにとってもみんなにとって楽しいものにしようという気持ちは伝わってくるが、準備の段階で作成に時間と労力がかかるもの、つまり負担の大きなものはたとえ活動に積極的な母親たちでも敬遠されがちである。「ボール入れ」や「指人形」や「手作りのカブトムシ」がそれに該当する。また「新聞紙ジャンケンゲーム」ではジャンケンがまだできない2歳児も楽しめるように、ゲーチョコキーパーのプラカードを担当の母親が作成してはどうかという助言をスタッフが行った。しかし、結局準備することが出来なかった。積極的な母親が集まっているとはいえ、家に帰れば育児や炊事、洗濯、掃除などの家事が待っている。準備にかかる手間の度合いを考慮して、楽しい活動がとり上げられるよう配慮することがスタッフ

側にも求められると思った。

ところで、遊びの提案の中にいくつかのわらべうた遊びが出てきたが、全く知らない母親がいた。わらべうた遊びは子どもの頃から伝承され遊ばれていると考えていたが、遊んだ経験がなかったり、名前ぐらいしか聞いたことがなかったりする親の世代になってきているのであろう。知らなかった母親に責任があるのではなく、そのような遊びを経験する機会がなかったということなので、ますます子育て支援活動の重要性を感じた。子育て支援活動は遊びの文化を伝える役割も担うことができるのである。

一方、S 児が泣きやまず母親の B さんは活動に参加できずにいた。母親と離れられない子どもは、部屋の中で母親のそばにいてもよいということになっていたが、予想以上に子どもたちは母親から離れることができ外で元気よく遊んでいた。そのような中、B さんは自分の子どもだけが母親から離れられないことを気にして心配そうであり、また活動に参加できない焦りや、自分だけが取り残されてしまうような不安なようすもかがわれた。スタッフが S 児に「一緒に遊ぼう。何しよっか？」と声をかけてもやはり母親から離れることはなく、泣きながら母親の手を引っ張って外へ行きたい意志を貫いていた。ホールと屋外を仕切るドアのところで B さんは S 児を抱いてホールの中を気にしている状況であった。「親離れのできない子をもつ親が、もどかしくてイライラしたり、どうなってしまおうだろうと心配になるのは、子を思う親の気持ちとしてごく自然なことだろう。」(清水、1999)ということのみんが理解し、スタッフや仲間の対応や援助が求められる。この場合、M 先生が B さんに後から、参加できていなかった活動内容について説明をした。簡単に援助しにくい時は、直接的に援助の手を差し伸べられなくても、安心感をあたえ、気持ちを共有してくれる人がそばにいることは大きな支えになる。そのような支えがあれば、せっかく有している積極的な気持ちを損なわず発展させることも可能になると考える。

#### 4-8-1. 事例 8

初回の活動で、学生スタッフ 3 名がアンパンマンの創作劇とアンパン

マン体操の創作ダンスをした。I 児の母親 T さんから「I はアンパンマン体操がすごく気に入ったみたいで、家で『アンパンマンまたしないかな？ アンパンマンまた来たらいいのにな』って言うてるんですよ。」という話を毎回聞く。お楽しみ会の企画で母親 T さんはアンパンマン体操を提案していた。お楽しみ会当日、T さんは自分自身で振り付けを考えてくる。T さんオリジナルのアンパンマン体操をみんなで一緒に踊る。他にも「なべなべそこぬけ」や「ロンドン橋おちた」など、みんなで協力して行う遊び方を担当の母親たちは工夫していた。

#### 4-8-2. 考察 8

T さんは子どもが喜んだアンパンマン体操を、お楽しみ会で自分が担当することを提案した。さらに、振り付けをアレンジするために、家で音楽を聴き、動きを考え、何度も練習されたそうだ。子どもたちが喜んで取り組んだ活動を、与えられてするだけでなく、今度は自分で創作し、準備し、緊張しながらも最後まで笑顔で踊った。活動に意欲的な母親は、やはりここまで主体性を持って取り組むのである。このような力をサークル活動に生かしていければ、子育て支援活動ももっと草の根的に広がるのではないかと思った。その他の遊びでも、大人も子どものように一緒に楽しんでいた。母親たちが積極的に企画の段階から取り組み運営することによって、活動全体が活気にあふれ、さらに「なべなべそこぬけ」のようにみんなで協力し大きなおなべを作り楽しさを増すような遊び方にも、挑戦していける雰囲気や団結力を生み出していることに、母親の秘めた力のすごさのようなものを感じた。

#### 4-9-1. 事例 9

おたのしみ会の日、H 児が家からシールを持ってきていた。H 児はそのシールをずっと手に握りしめている。Y 児はそのシールが気になりずっと H 児を追いかけている。Y 児の母親は「やめなさい。H ちゃん嫌がっているでしょ。」と止めさせようと捕まえる。しかし、Y 児は H 児が手に持っているシールへの執着が続き H 児の後ろを離れない。H 児の母



親は「H しまつてきなさい。」と言ひ H 児は母親の鞆の上に置いた。それを見ていた Y 児は鞆のそこに行ったり、また H 児に抱きついたりして、シールと H 児から離れない。とうとう H 児は泣き出してしまふ。

#### 4-9-2. 考察 9

幼稚園や保育所では、参観日などの行事のとき以外は基本的に子どもだけである。しかし、子育て支援センターでは母親が一緒である。母親が一緒にいる場では子どもになかなか思うように声をかけられない。特に、注意をする場合は難し。この事例の場面でも声がかけれず困った。Y 児はシールが気に入りずっと H 児を追いかけている。このような時、保育現場では保育者が的確な指導を H 児および Y 児にする。しかし母親がすぐ近くにいるため、保育現場で行うような対応がしにくい。このときの状況からすると、母親がすぐにシールを鞆の中に片づけるか、子どもと一緒に片づけに行けばよかつたのだろうが、そのように声をかけることができなかった。ここでは、6 回の活動を重ねているとはいえ、もっとスタッフと親子の信頼関係を深めること、そして子どもへのかかわり方を勇気と一貫性をもって伝えることの大切さを感じた。

### 5. 学生の考察から（学生の学びに関する考察）

#### 5-1. 事例 1 に対する学生の考察から

“親子活動”は親子両方にとって意味のある、つまり親と子の育ちを支援する活動になることが大切であることは理解できるのだが、実際“親子活動”の場に参加すると、母親は子ども背後に隠れ、あたかも子どもの付属品のような感じで参加している姿がまだまだ多く見られる。このような母親たちが主役となるような活動を目指すには、まずは、母親自身を一人の人間として認めていかなければならないことに、この事例を通して気づいている。ここでの実践は、積極的な母親だったため、自分を認めてほしいという思いを素直に表してくれた。そのことによって、すべての母親に共通するであろう思いに気づくことができた。NPO 法人びーのびーのが

主催する「おやこの広場びーのびーの」の活動においても、ひろばは子どものための場か、親のための場かという議論が起こることがあるという。「びーのびーのは『親子（両方にとって）のひろば』であることに大きな意味があるのではないか」（NPO 法人びーのびーの、2003）と結論している。学生たちもそのことを体験的に理解し、そして次の段階として、活動の中でいかにその思いを受け止め、実際に一步踏み出せるように援助していくことが課題となることを認識している。

また、母親たちが自己紹介で話している内容は、今後学生が親と交流を図っていく場面で会話のきっかけとして、あるいは対話を展開する際の話題として活用することができる。活動初日で緊張しているにもかかわらず、会話が盛り上がっている場面を目の当たりにし、母親たちの話題に耳を傾け、そこで得た経験知は、今後の子育て支援活動（特に、親と対話すること）に役立つであろう。

## 5-2. 事例2に対する学生の考察から

保育者養成課程で学ぶ自分たちは、毎日学びの場が用意されている。主体的に活動し、自覚的な学びが保障されているといえるが、母親の場合、ある日突然親になるといっても過言ではなく、特別に親教育を受けるわけでもない。もちろん、日々の子どもとの生活の中から試行錯誤を繰り返し、体験的に学んでいくことも必要であるが、やはり学ぶにあたって支援してくれる人が居れば、学びはもっと豊かで円滑のものになるであろう。一見、当たり前のようなことでも、日中は親子二人きりで生活している環境では、体験的に学ぶ機会は乏しいといえる。もっとも、今回の実践のように、積極的に自ら活動しようとする母親であったからこそ、事例のような場面に出会い、母親の実態を把握し、どうすればいいか考える機会となった。そして、タイミングの良い適切なアドバイスや、スタッフが実践している場面からさりげなく気づいてもらえるような援助も必要であることを認識している。親育ちの支援へと今後発展させていくにあたり、実はこのような「さりげない支援」が大切であることを理解して取り組んでいくことに意味があると考ええる。

### 5-3. 事例3に対する学生の考察から

“おやつ”の時間は子どもにとって楽しい時間であることは間違いないが、親にとってはコミュニケーションを深める絶好の機会であることを、体験的に学習できたことは意義深い。親子を集めて実施される子育て支援活動では、そのプログラム内に必ずと言っていいほどおやつ時間が設定されている。親子一緒に遊んだり、歌ったり、製作したりして、おやつを食べて、片付けて帰るという流れが一般的である。子育て支援スタッフの養成講座や研修会においても、活動計画例が提示されたりするが、そこでも“おやつ”の時間が組み込まれている場合が多い。プログラムに入っているのが一般的だからという理解ではなく、“おやつ”を食べるという活動の意味を体験的に理解して導入することで、活動を支援する側の支援のあり方も変わってくる。単なる時間つぶしとか、子どもが喜ぶからではなく、そこで母親や子どもたちが得られる経験を考え、環境を構成し、実践を展開していこうとする姿勢がこの事例から養えているといえる。これに加え、食育について考える視点を持てるようになることが望ましい。

### 5-4. 事例4に対する学生の考察から

「最近の母親は全く～ない」というような表現で、母親の子育てに対する姿勢に否定的な発言をよく耳にする。が、多くの母親はこの事例のOさんのように、子どもの行動において周囲に気を遣っているのも事実である。子どもが居ることで、遠慮や気遣いがあることを理解して子育て支援活動に臨むことが大切である。さらに、その年齢の子どもの一般的な発達の姿を知らない親が多いため、迷惑ではなくて「お互いさま」であるという意識も育ちにくい。2歳の子どもであれば、時間がかかるにもかかわらず、自分でやりたいと言い張るのは当たり前発達の姿である。そのことをお互いが知っていれば、「お互いさま」という意識が育ち、母親の子どもに対する理解も深まるので、日々のかかわりに良い影響を与えることにつながであろう。親が子どもに対する理解を深めていくことが親育ちの支援でもあるので、このような場面で求められる子育て支援の実践力は重要である。

### 5-5. 事例5に対する学生の考察から

子育て支援に関する講義スタイルでの授業では、子育てサークルの現状や課題についても学習している。福井聖子（2004）の「子育てサークルの課題の検討と支援についての考察」によると、活動回数が週1回という活発に活動している子育てサークルは、月1・2回のサークルよりも活動場所として屋外を多く取り入れているという報告がされている。子育てサークル運営の手がかりとして、活動場所として屋外を取り入れることは、活動を活性化するには良いということは机上の学習を通して理解している。しかし、事例5と考察に述べられているように、実際に屋外での子どもたちや母親たちの様子を目の当たりし、自分も一緒に体験し、さらに今までの室内での活動にもかかわってきた経験を通して、屋外での活動の効果を見い出せた。このような過程を経て、屋外を活動場所として取り入れることの意味を十分理解できた。そのことが、今後学生たちが子育て支援の実践プログラムの立案や、サークル活動を運営していこうとする親たちへの支援活動において、より適切なアドバイスを可能にすると考える。

### 5-6. 事例6に対する学生の考察から

柏木（1997）は、〈子育て広場武蔵野市立0123 吉祥寺〉で開いた「子育て談話室」という3歳までの子どもをもつ母親の集いに講師として参加した際、母親たちに異口同音に言われたのが“自分の時間がもてない！”という嘆きで、「それは決して自分勝手でも子どもをなおざりにしてもいない、皆子どもを愛し子育てを懸命にやっている、その一方で“自分の時間を、自分のことを”と真剣に願う気持ち」（柏木他、1997）に強く打たれたと記している。このような母親の思いへの理解を深めるためにも、この日の取り組みを通して、子どもと離れて自分の時間を持てたときの母親の態度や心情を直接見聞きできたことは非常に意義深い。子どもと離れることで単なるリフレッシュをするだけでなく、実は子どもとのきずないっそう深めている姿にもふれている。今後、親育ちへの支援を考えると、親が抱くこのような心情を無視してはかかれぬ。また、母親の居ないときの子どもと接することで、子どもにとっての母親の存在を再認識

できるだろう。考察の中では直接的に述べられていないが、「やはり母の存在は大きい」「お母さんは超えられない」という実感を活動後に語っていたことから、子どもの心情、親の心情への理解が深められたといえる。両者のさまざまな心情への理解が、意味のある子育て支援に取り組んでいける力を高めることにつながるのである。

#### 5-7. 事例7に対する学生の考察から

この事例からは、母親の実態を複数の側面からありのままに理解することができているといえる。まず、自宅へ持ち帰ってしなければならない準備がともなう活動の場合は、かなり負担に感じるという点である。たとえば、積極的な母親が集まっているとはいえ、家に帰れば育児や家事労働が待っているであろう。子育て中の母親の24時間を絶えず念頭においた支援が求められることを認識できていることが重要である。

また、わらべうた遊びに関しては、「ずいずいずっころばし」を知らない母親がいた。知らない母親を問題視するのではなく、遊び文化が伝承していない現実を知ることが大切である。保育者養成課程で勉強している学生は、授業の中で遊び文化を伝承してもらえるため、いろいろな遊びを知っているし体験している。しかし、母親の場合、保育に関連する教育を受けた経験がある場合は別として、一般的にはそのような機会はない。以前であれば子ども時代に遊んだ経験があったのであろうが、そのような世代ではなくなっていることにも気づいている。したがって、子育て支援活動の役割として遊びの伝承があることを明確に理解できた。

この事例からもう一つ理解を深めることとして、同じくらいの年齢を持つ子どもを持つ親は、どうしても子ども同士を比較してしまい、心配や不安が絶えないという点である。清水（1999）は親子支援に取り組む保育者へのメッセージとして、「親離れのできない子をもつ親が、もどかしくてイライラしたり、どうなってしまおうだろうと心配になるのは、子を思う親の気持ちとしてごく自然なことだろう。」と述べているが、学生たちはそのような親の自然な気持ちを理解した援助の手が必要であることを実感できている。

### 5-8. 事例8に対する学生の考察から

子育て中の母親は、実はたいへんパワーを持っていることに驚いている。子育て中の母親はどちらかというと「やってもらう」ことを期待しているようにとらえられがちであるが、そうではない母親たちの姿がこの事例でみとめられた。まさに「他者との協同や連帯を通して、構成員の一人ひとりが仲間に支えられながら自己の可能性を切り開くことができる」（植田、2003）という子育てサークルの存在意義が果たしているといえる。母親の、熱心に活動に取り組む姿勢、活動するエネルギーは何を意味するのかを考え、受け止めていけることが、子育て支援力を高めることにつながるであろう。

### 5-9. 事例9に対する学生の考察から

この場面では、とうとう勇氣ある対応は子育て支援スタッフもできなかった。子育て支援と保育者の役割を研究している井上ら（2005）も、子育て支援センターの活動における子ども同士のトラブルの対応について、保育現場では「ごく自然に行われている保育の中の出来事で、保育所では何事もなく出来ていたことが、センターでは躊躇してしまい、親と一緒に子どもと接するときの難しさを感じながらの毎日だった。」（井上他、2005）と述べている。学生もまさに井上らと同じ思いをこの場面で抱いている。第6回目の活動日で、母親たちとも子どもたちとも、ほとんど自然体でかかわれるようになったと実感しているのだが、子どもへのかかわりにおいて勇氣と一貫性をもって母親に伝えていこうと思うと、もっとスタッフと親子の信頼関係を深めることが必要なのではないかと感じている。子どもの発達の援助と親の発達の支援を目的とした真の子育て支援であるためには、子どもへのかかわり方を伝えることは大切である。しかし、伝えることがいかに難しいかを身をもって体験している。今後、支援の場に立つにあたって、このようなかかわりも引き受けなければならないと覚悟して臨むことに意味があると考ええる。

## 6. 全体的考察

学生の学びの検討から、子育て支援活動に積極的であり、できれば自主的に子育てサークルを運営したいという親を対象として実施している事業との連携は、学生が親とのかかわり方や支援のあり方を学習する環境として、より深く学ぶ機会を得ているようすがうかがわれた。何事にも積極的に意欲的な親の力を借りて、学生の学びが引き出され、より多くの学びが期待できる場になっていると考えられる。実際、積極的で、興味や関心の高い親の方が、コミュニケーションは図りやすいであろう。ここでの経験を通して、(1) コミュニケーション力を高める、(2) 一つ一つの活動の意味を探ろうとする姿勢を養う、(3) 子育て支援のあり方を考察しようとする姿勢を養う、という学びが可能になった。このような学びが、将来意味のある子育て支援活動の立案や実施につながっていく、つまり子育て支援力を高めることにつながっていくと考える。

また、活動プログラムとして、「一緒に食べる活動」や「屋外での活動」が、学生と親や子どもとのコミュニケーションを深める機会として、非常に有効であるということもわかった。さらに、①単に親子で遊ばせてあげるだけでは不十分であること、②知りたい、知ってほしいという思いが強く、何事にも積極的であるため、母親たちが自分たちでやってみることができる場、スタッフがやっているのを見て学習できる場、さらに理解を深められるようスタッフが声をかけていく場を積極的に設けること、③それらの場を通して学ぶ内容や方法、そして学ぶ過程そのものがとても重要であるので、スタッフ（指導者）側に子育て支援の専門性が求められること、への理解や配慮が大切であるとわかった。

以上のような学び取った内容そのものには、決して新規性があるわけではないが、自らの体験を通して学び取ってきたことに意義があり、そのような学び取る過程が重要である。親が子育てに本気がかかわるようになるための子育て支援活動を実践するためにも、将来支援する側に立つ保育者養成校の学生が、保護者と信頼関係を築くことや子どもの内面を理解するに

は、個別な事例を通して一つ一つ考えていけるような力をつけていくことが必要である。“子育て支援”を扱う力の育成を考える場合、これまでの教育方法における「保育実習」という枠組みの中だけでの学びでは対応しきれないことはすでに認識されているところである。しかし、保育者養成カリキュラムの中で大きな教育効果が期待できるような方法を実践していくことの困難さもまた、同様に認識されている。そのような中、今回の研究対象とした「ふたば」に参加した母親たちのように、意欲的で積極的な姿勢をもった母親たちのマンパワーの活用が、子育て支援力の育成においてより成果が期待できる教育方法の開発を可能にすることが示唆された。もちろん、すべての親子を対象とした子育て支援力の育成が課題ではあるが、まずは「親育ち」の支援対象として、積極的な親から支援の輪を広げていくことも、親として自覚的に学ぶ姿勢がより自然体で普及する方法の一つであると考えられる。

## 7. 本格的な実践に向けて

子育て支援活動に積極的であり、できれば自主的に子育てサークルを運営したいという親と連携した今回のような実践の場は、学生が親とのかかわり方や支援のあり方を学習する環境として、より多くの学びが期待でき、そして親の方も学生とのかかわりから学びが得られるようすがうかがわれた。学生も親もお互いが主体的に活動し、自覚的な学びが可能となるような教育方法として期待できることがわかった。

さらに、ここで得た分析結果は、学生たちが子育て支援（特に相談・助言）力を高めるために必要な、効果的な実践プログラムの作成に役立てることができる。特に、親と対話する力をつけるにあたって、どのような活動内容や活動方法を導入していくかは極めて重要であり、よりのびやかな交流の場と、より効果的な実践の場の準備を目指し、今後本格的な実践プログラムの作成を試みる。



## 文 献

- ・阿部和子、『保育者のための家族援助論』、萌文書林、2003、128-129
- ・NPO 法人びーのびーの編、『おやこの広場びーのびーの』、ミネルヴァ書房、2003、210
- ・柏木恵子・森下久美子編著、『子育て広場武蔵野市立 0123 吉祥寺ー地域子育てで支援への挑戦ー』、ミネルヴァ書房、1997、37
- ・清水弘司、振り返って見た子ども時代、『21世紀の親子支援ー保育者へのメッセージ』、ブレン出版、1999、158
- ・植田章、『はじめての子育て支援ー保育者のための援助論ー』、かもがわ出版、2003、101
- ・井上裕美子・内村真奈美、子育て支援と保育者の役割、『日本保育学会第58回大会発表論文集』、日本保育学会第58回大会準備委員会、2005、994-995
- ・福井聖子「子育てサークルの課題の検討と支援についての考察」子ども家庭福祉学、第4号、2004、1-50
- ・丹羽洋子、母親たちにとっての「子育て支援」、『発達 No. 84』、ミネルヴァ書房、2000、38-39
- ・山本理絵、グループ活動をとおしての親の育ちあいー子育てグループ活動の報告、『子どもの援助と子育て支援ー児童福祉の事例研究ー』、ミネルヴァ書房、2002、244
- ・岡健・久保田力・望月威征、子育て支援では何が問題になるのか、『保育の実践と研究 Vol 6. No 3』、スペース新社保育研究室、2001
- ・池田祥子、「子育て支援」という社会理念の検討ー現代の「子育て・教育」の閉塞感を拓くために、『保育の実践と研究 Vol 6. No 3』、スペース新社保育研究室、2001
- ・汐見稔幸、無免許運転？の親を励ますー育児を支援するとはどういうことかー、『発達 No. 84』、ミネルヴァ書房、2000、72-75
- ・山縣文治、子育てを見る目は変わったかー子育て支援サービスの課題と方向ー、『発達 No. 84』、ミネルヴァ書房、2000
- ・宮崎豊、子育て支援教室における学生の学び (3)、日本保育学会第58回大会発表論文集、2005、678-679

## 付記

本研究の一部は、科学研究費補助金（基盤研究 C）課題番号 17500527 「『親育ち』への支援と子育て支援（特に相談・助言）力を高める保育者養成方法の開発」（研究代表者 中西利恵）による。